

## 中国の初期稲作遺跡を掘る ―浙江省田螺山遺跡の日中共同調査―

中村慎一（金沢大学人文学類）

### 遺跡の概要

中国浙江省余姚市にある河姆渡遺跡といえば、大規模な木造建築群や大量の有機質遺物の出土で知られ、世界的に著名である。その河姆渡遺跡の北東 7 キロメートルほどのところに、この田螺山遺跡はある。所在地は余姚市三七市鎮。寧波市街と余姚市街のほぼ中間に位置している（図 1）。

遺跡は、高さ 200 メートルほどの低い山並みに囲まれた小盆地の中央に立地する（写真 1）。現況は水田で、水田面の海拔高度は 2.3 メートル前後しかない。田螺「山」といっても、周囲の水田からわずかに数メートル高出した小山にしかすぎない。遺跡はそこを中心に、南北 220 メートル、東西 160 メートル、面積約 3 万平方メートルの範囲内に広がっている。

その田螺山と名づけられた高まりの上にはもともと一軒の村工場があった。2001 年 12 月、その工場の敷地で井戸を掘ったところ、地下 3 メートルの深さから数多くの土器片、木材、動物骨などが出土した。工場主はそれを河姆渡遺跡の現地にある河姆渡文化博物館に通報し、そこからさらに省都杭州の浙江省文物考古研究所へと伝えられた。

浙江省文物考古研究所による正式な発掘調査が始まったのは 2004 年 2 月のことである。それ以来現在にいたるまで調査は断続的に継続されている。発掘責任者は同研究所の孫国平氏である。

発掘区での堆積層の厚さは最大で 3.3 メートル。第 1 層から第 8 層に分層されるが、そのうちの第 3～8 層が河姆渡文化層である。その年代は年輪校正年代で 7200-6400 年にほぼ収まる。便宜的に、前期（＝第 8・7 層）、中期（＝第 6・5 層）、後期（＝第 4・3 層）に区分されている。全体としては、河姆渡文化のタイプサイトである河姆渡遺跡の第 2～4 層にほぼ相当する文化内容を見せている。因みに、第 2 層は河姆渡文化層の上を厚く覆う水成堆積層、そして第 1 層が表土層となっている。

### 遺構と遺物

遺構としては、高床式と想定される木造建築址、水場の木組み遺構（写真 2）、ドングリ貯蔵穴、墓などが見つかっている。

中期の柱穴の中には木製礎板が何枚も重ねて置かれることがある（写真 3）。これは河姆渡など他の河姆渡文化遺跡には類例を見ない立柱法である。軟弱な地盤であったため、柱の不等沈下を調節する必要があったのだろう。一方、前期の木造建築では、まだ最終的に確認されてはいないが、柱穴を掘らずに柱を直接地中に打ち込む方式がとられていた可能性が高い。

ドングリ貯蔵穴は、時期が判明したものではその大多数が中期に属する。集落の縁辺部を弧状に取り巻くように 20 基余りが検出されている。大きさはさまざまであるが、大きなものでは縦、横、高さいずれも 1 メートル近いものもある。その中に収められていたのは大部分がイチイガシの実であった。

遺物としては、土器、石器、骨角器、木器、編み物、玉器などがある。骨角器のなかでも「骨耜」（骨製のスキ）は河姆渡文化を代表する器物の一つであるが、この遺跡からも多数出土している。中には、木柄に縛り止めるための紐が孔の部分に残存していた例もある。木器のなかでとりわけ目を引くのは櫂である。未成品を含めすでに 8 点が出土している。今のところ丸木舟本体の出土はないが、水上交通の手段として丸木舟が多用されていたことが推測できる。玉器は崧沢文化期以降に出現する軟玉製品とは違って、それより軟らかい蛍石製である。一つのピットから製品、未成品、原材、製作用石器が一括で出土しており、当時の玉器製作法を復元する上で格好の資料を提供している。

人工遺物にもまして豊富に出土したのが木材、植物種実、動物骨などの自然遺物である。しかも保存状態はきわめて良い。それはいうまでもなく、文化層が厚さ 2 メートルにも達する粘土質の水成堆積層にパックされていたことによる。下位の層ほど有機質遺物の保存状態が良好なのは河姆渡遺跡の場合と同じである。前期層では草本の葉さえ残されていた。

### 日中共同研究プロジェクト

田螺山遺跡の発掘調査が始まった 2004 年、おりしもわれわれのグループは科学研究費補助金の助成を受け《長江下流域新石器文化の植物考古学的研究》を展開していた。新たに発見されたこの遺跡の重要性は、この研究に参加していた者の目には明らかだった。そこで急遽われわれは、浙江省文物考古研究所、北京大学考古文博学院、中国社会科学院考古研究所と共同で新たなプロジェクトを立ち上げることにした。それが《田螺山遺跡自然遺物の総合的研究》である。幸いにも、引き続き科学研究費を受けることができ、現在も研究は進行中である。

このプロジェクトの主な日本側メンバーには、本稿の執筆者以外に、鈴木三男（樹種同定）、金原正明（花粉・珪藻・種実・寄生虫卵分析）、宇田津徹朗（プラントオペール分析）、中島経夫（魚骨分析）、松井章（動物骨分析）、南川雅男（アイソトープ分析）、中村俊夫（年代測定）といった面々が名を連ねている。研究成果の詳細は報告書に譲るとして、ここでは主要な成果だけをごくかいつまんで紹介しておこう。

この遺跡は完新世の海進期に営まれた遺跡であるが、珪藻分析の結果から、ヒプシサーマル期がピークを迎える少し前、上昇を続けてきた海水準が一端少しばかり下がった時期に出現した陸地（河辺湿地）の上に形成された遺跡であることがわかった。しかし、その後海水面がふたたび上昇したのにもとない遺跡は海面下に没し、集落は放棄された。つまり、第 2 層の水成堆積層はそのときに形成された海成層だったのである。

湖沼や湿地に接して集落を構えた田螺山人の生活は、水辺の環境にみごとに適応したものだった。すでに稲作を始めていたとはいえ、あいかわらず野生イネの採集も続いていたことは、出土炭化籾（写真 4）の基部脱落痕の観察から明らかである。それと同時に、ヒシやオニバスの実を集め、淡水魚やカメを捕らえ、スイギュウや各種のシカ類を狩っていた。そこにブタの飼育、山野での狩猟やドングリ採集などが加わる多角的な生業形態であった。

最後に一つ、特筆すべき成果に触れておこう。それは「茶畑」の発見である。この遺跡の前期層で、一定の間隔を置いて並ぶ根株が検出された（写真 5）。その木材構造を

調べたところ、調べた 6 点のすべてがツバキ *Camellia* 属の同じ種の材であることが判明した。ツバキ属にはツバキ、サザンカ、チャノキ (茶) など多くの樹種が含まれるが、材構造が互いによく似ており、種を識別することまでは難しい。しかし、出土材の構造は栽培茶のそれと良く一致すること、また、人為的に植栽されたと判断されることから、それは茶の木であると推定された。現在では広く世界中で愛飲される茶のルーツが中国にあることはよく知られているが、それが今から 7000 年前にまで遡ることが明らかになったのである。



図 1：田螺山遺跡の位置



写真 1：田螺山遺跡全景



写真 2：水場遺構



写真 3：柱穴の中に置かれた礎板



写真 4：炭化稲穂

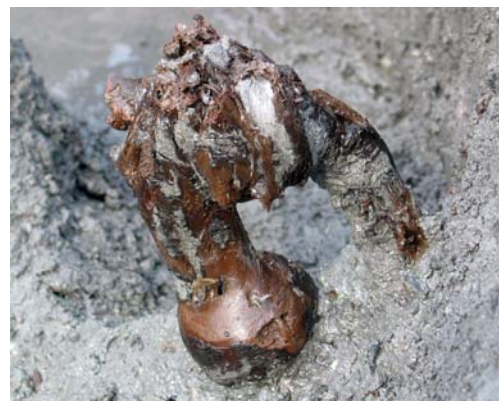


写真 5：「茶」の根株